

三浦隆宏著

『活動の奇跡』

アーレント政治理論と哲学カフェ』

法政大学出版局、2020 年
380 頁、3,400 円（税別）

本書『活動の奇跡 アーレント政治理論と哲学カフェ』は、その題が示す通りアーレントの思想と哲学カフェを結びつけた、挑戦的な著作である。本書の著者三浦隆宏氏は、アーレント研究者であり、また 200 以上の哲学カフェの実践・参加経験者でもある。先に私は、本書はアーレントと哲学カフェを「結びつけた」と書いたが、より正確には、本書はアーレント思想とその中心となる概念「活動」の具体的な現れとしての哲学カフェの狭間を往復する「旅の書」であり、したがって「哲学カフェ論」と「アーレントの解説」を単に組み合わせたものではない。アーレント流に言い換えれば、本書の魅力はアーレントの政治思想と「結びつきつつ分離する」かたちで哲学カフェについての思索をめぐらせている点にあると言えるだろう。

本書で論じられるアーレントの活動論や自由論（主に第 1 部）は、「なぜ現代社会において人々は哲学カフェへの衝動に駆り立てられているのか」を考える際の重要な補助線を与えてくれた。アーレントの「人権論（あるいは権力／暴力論）」「思考論」（主に第 2 部）では「哲学カフェの主体は誰か」を考える上での重要な示唆を与えるものであった。また、本書のユニークさが特に表れていると考える「アーレントの他者論・観客論」（主に第 3 部、特に第 9 章）では、哲学カフェにおける観客（ないしは傍観者）に着目し、「活動における他

者（聴き手）の決定的な重要性」や「哲学カフェが持つ公共性の意味」などを見事に論じている。

他方で、本書のいくつかの議論で著者がアーレントに「結びつきすぎている」と感じることもあった。特に 2 章の哲学カフェに関しては、著者に代わってアーレントがやや多くを「代弁」したことで、著者の哲学カフェの豊かな経験が背後に隠れてしまったように思われた。たとえば、41-42 頁で筆者は進行役の役割を論じているが、このトピックについて論じていたわけではないアーレントを引き合いに出す必要があるのかはわからなかった。他方で、第 5 章（「私たち」という感覚を育むために）や補論 2（哲学への弱い紐帯）などはアーレントの政治思想とうまく結びつきつつ分離し、アーレントと哲学カフェの狭間で思考する著者の視点が見事に示されており、特に興味を持って読んだ章である。他の章と比べると、読者はこの章の多くの文が「アーレント」ではなく「私（著者）」の目線で書かれていることに気づくだろう。それでもなお著者が進行役として哲学カフェで感じた困難さやそこで生じた「即興」の感覚、日本における「○○カフェ」の広まりに対する所感、哲学カフェの政治性、哲学カフェが育む「私たち」の感覚などの説明やそこで用いられている言葉の選び方一つ一つには、確かにその前の章まで論じてきたアーレントの「軌跡」を見てとることができる。

以上、哲学カフェにおける「哲学」と「カフェ」の狭間にある政治性や世界のリアリティを考える上で、本書は重要な知見を与えてくれるものである。

西山溪（同志社大学）